

2026.03.08.

「神様に遣わされた者」

旧約 出エジプト3章7～12節

新約 ヨハネによる福音書7章25～36節

1. はじめに

いよいよ来週は、中村証二さんを迎えての百周年記念のリードオルガンコンサートが行われます。これは私どもの教会がこの地で100年間、正確には101年ですが、神様の救いを宣べ伝え続け、救われる者が起こされ、主の日の礼拝を捧げ続けることが出来たことを感謝して催されます。この間、ずっとリードオルガンの音色がこの地に鳴り響いてきました。キリストの教会では、礼拝の時に音楽が用いられます。そこで用いられる楽器は時代とともに変わってきましたし、奏でられる音楽も変わってきました。しかし、ずっと変わらないことがあります。それは、父と子と聖霊なる神様を誉め讃えるという心です。父と子と聖霊なる神様を信じ、愛し、お仕えする信仰です。音楽は私共の心を一つにして、神様に向かわせます。そして、私共は心からなる賛美を神様に捧げてきました。心を一つにするということは、とても難しいことです。人はそれぞれ、色んなことを思い、考えています。置かれている環境・状況も違います。そのような私共が、オルガンに合わせて賛美をする時、心が一つになります。音楽は、神様が私共に与えてくださったとても大きな恵みです。御国においても、賛美が無くなることはありません。それどころか、御国においてこそ、最も素晴らしい賛美が捧げられることでしょう。私共が賛美を捧げる時、私共は最も御国に近付いていると言っても良いほどです。今日も聖書によって語られる神様の御言葉をしっかり聞き取り、父・子・聖霊なる神様に心を向けて、心を一つにして主を誉め讃えたいと思います。

2. 誰を賛美するのか

私共が賛美するのは、神様です。神様以外のものを賛美することはありません。そして、私共が賛美する神様とは父と子と聖霊なる神様です。それ以外のものを賛美することはありません。神様以外のものを賛美する。それが偶像礼拝です。ここで大切なことは、イエス様が神様であるということをしっかり受け止めることです。「イエス様は人間ではないのか」と問われるかもいるかも知れません。勿論、人間です。しかし、同時に神様です。これをキリスト両性論と言います。イエス様は人性と神性を持っておられ、その二つは「混ぜ合わされることなく、変化することなく、分割されることなく、引き離されない」（カルケドン信条より）というのが、私共が受け継いできた信仰です。中々ややこしい言い方ですけど、要するに「イエス様はいつでも人間であり、神様です」ということです。十字架の上では人間だったけれど、復活して神様になったという話ではないとい

うことです。このことを今日の御言葉は私共に示しています。

イエス様が人間であることを否定する人はいないでしょう。イエス様は弟子たちと旅をし、会話をし、食事もしました。目で見ることが出来、手で触れることが出来ました。ですから、イエス様が人間であることは疑いようがありません。しかし、ただの人間であったのなら、どんなに偉い人であったとしても、私共を救うことは出来ません。そして、お語りになったことが絶対に正しいとも言えないでしょう。人間には限界があり、間違いを犯す者だからです。イエス様の十字架が全ての人の罪を贖うことが出来るためには、つまり私共が救われるためには、イエス様がただの人間ではなく、神様でなければなりません。私共の身代わりになるためには、私共と全く同じ人間でなければなりません。しかし、ただの人間ならば私共の身代わりになれません。ただの人間は自分の罪があるのですから、他の人の人の罪まで担うことは出来ないからです。ただ罪のない神の御子、神様だけが完全な身代わりとなることが出来た。そして、それは全ての人に及ぶことが出来ます。こんなイメージになるでしょうか。神様であるイエス様という器は無限なので、どんなにたくさんの人の汚れた水を注いでも、これでもう満杯、これ以上は要りませんということにならないということです。ですから、私共はこのお方を神様として感謝と喜びをもって賛美するわけです。

3. イエス様を知っている？

イエス様は自らが神であることを「自分は神である」という言い方ではなくて、色々な別の言い方で告げられました。今朝与えられた御言葉では、ご自分を「天から来られて、天に帰る方」として語られました。ヨハネによる福音書では、「私はどこから来たのか」という言葉は「私は誰であるか」ということと同じです。「私はどこへ行くのか」も同じです。

人々は「わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。」(27節)と言いました。それは、イエス様がナザレの村の出身であるということを知っているということです。ヨハネによる福音書 1:46 に「ナザレから何か良いものが出るだろうか」とナタナエルが言ったと記されています。ナザレからメシアが生まれなんてことは聖書で預言されていないからです。もっとも、イエス様がお生まれになったのはダビデの町ベツレヘムでした。人々はそれを知らず、ナザレ出身のイエス様はメシアであるはずがないと理解する人もいたわけです。確かに、イエス様はナザレでお育ちになり、父の名はヨセフで職業は大工、母の名はマリアです。しかし、それを知っているということと、イエス様が誰であるかを知っている、メシアであり神の御子であることを知っているということとは全く別です。それは、イエス様を中学校や高校の社会の教科書で習ったので知っているということと、イエス様を「わが主、わが神」として知っていることは全く別物であるということと同じです。イエス様が歴史上の人物ではあるけれど、それを知っているだけなら、イエス様について何も知らないのと同じです。イエス様を知るということは、イエス様を人間として知るということだけではなく、イエス様を神の子、神様として知る、つまり「わが主、わが神」として知る、賛美すべき方、

崇めるべき方、拝むべき方として知るといことです。

人々の「わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。」という人々の声を聞いてイエス様は「大声で」告げました。この時イエス様は、ごちよごちよ言われたのではなくて、はっきりと、大声で告げました。イエス様は人々に自分が誰であることを告げるために、大声を出されたのです。大声で言うのは、このことをはっきり伝えたいからでしょう。皆さんが大声で告げられる時のことを思い出せば分かります。余談ですが、説教の声は小声ではダメです。どんなに精緻な原稿を書いても、小声で、何を言っているのか分からないような説教ではダメです。説教は伝えなければならないことがはっきりしているのですから、それは明瞭に大きな声で語られなければなりません。ですから、本当はマイクは要らないのではないかと、私は思っています。

4. どこから来て、どこに行くのか：イエス様は誰か

イエス様はこう告げられました。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。7:29 わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」(28.29 節)

人々が自分のことをナザレの村出身であることを知っているから、自分を知っていると言っているのを聞いて、イエス様は「そうではない。あなたたちは何も知らない。わたしが何者なのか、あなたたちは何も知らない」そう、告げられたのです。イエス様は「自分はわたしをお遣わしになられた方のもとから来た」と告げられました。「この方は真実な方であり、あなた方はその方を知らないが、わたしはその方を知っている」と言うのです。聖書で「真実な方」と言えば神様しかおられません。そして、「人々は知らず、イエス様は知っておられる方」とは誰でしょう？ヨハネによる福音書が1章18節で「いまだかつて、神を見たものはいない。父のふところにいる神の独り子である神、この方が神を示されたのである」と記されています。「人々は知らず、イエス様は知っておられる方」、それは天の父なる神様です。つまり、イエス様は、「自分は天の父なる神様のもとから来た、わたしは父なる神様を知っている、あなたたちは知らない、わたしはその方によって遣わされた」そう告げられたわけです。ここでイエス様が言おうとしていることははっきりしています。「わたしは神様のもとから遣わされた神の御子である、神である」といことです。

5. どこへ行くのか：イエス様は誰か

イエス様はご自分がどこから来たのかに続いて、どこに行くのかと告げられます。33.34 節「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。7:34 あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」私共は、この言葉を聞いて「イエス様は復活・昇天」のことを告げられた

のだとすぐに分かります。しかし、イエス様の十字架も復活も昇天もまだ知らなかった人々は、イエス様が何を言っているのか全く分かりませんでした。イエス様はここで、復活の後、自分をお遣わしになられた天の父なる神様の御許に帰る、つまり天に昇られる、昇天すると言われたのです。しかし、イエス様をただの人間としか思っていない人々は、イエス様が言われていることがどういうことなのか、さっぱり分かりませんでした。それで「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。」(35 節) と互いに言い出すしまつでした。ここで「離散しているユダヤ人」という言葉が出てきますが、これは「ディアスポラ」という言葉ですが、ユダヤ人達は旧約の時代に様々な国に支配されまして、その時々自分たちを支配している国の別の地域に移住したり、させられたりしました。また、交易を生業とするユダヤ人も多く、ユダヤ以外の多くの町に住んでいる人達がありました。ユダヤ本国に住んでいる人達により、外に住んでいるユダヤ人の方が多かったと言われているほどです。その人達が巡礼のために祭りの時には大勢やって来ました。ペンテコステの時にイエス様の弟子たちが色々な国の言葉でイエス様のことを語ったのは、その時もペンテコステの祭りに大勢のユダヤ人達がエルサレムにやって来ていたからです。イエス様は「天の父なる神様の御許に帰る」ということで、ご自身が神の御子・キリストであることを告げたわけですが、人々はそれを理解することは出来ませんでした。

どうして、彼らはイエス様がメシアであると分からなかったのでしょうか？それはメシア、キリストに対しての自分のイメージとイエス様の姿がかけ離れていたからではないでしょうか。私共は自分が作り上げた神様の姿や有り様というものに囚われます。この「自分が作り上げた神様の姿や有り様」というものが偶像そのものなのですけれど、中々その自分が作り上げたイメージから自由になれない。それが偶像礼拝の罪であり、その罪を砕くために神様は私共にイエス様を与え、聖霊を与え、聖書を与えてくださいました。聖書が告げる神様が神様であり、聖書が告げるイエス様がイエス様なんです。しかし、人々のメシアのイメージはイエス様と合わなかったのでしょうか。だから信じないし、受け入れられなかったのでしょうか。このような罪を私共もしばしば犯してしまいます。聖書の言葉よりも自分のイメージや信念が大切にされると、私共は新しくされることがありません。しかし、信仰の歩みというものは、いつも新しくされていきます。それは、神様について、イエス様について、与えられている救いの恵みについて、そして自分の罪について、聖霊なる神様によって聖書から新しく知らされるからです。そして変えられていく。変えられ続けていく。これを成長と言っても良いでしょう。私共の信仰は聖霊なる神様のお働きの中で成長し続けます。これは本当のことです。

6. 時が来ていない

では、どうしてイエス様はこのように語られたのでしょうか。こんな相手に通じないような言い

方じゃなくて、もっとはっきり言えば良かったのではないか？それに対してすぐに思いつく理由は、この時イエス様が「わたしは神の御子メシア、神である」と告げれば、イエス様を殺そうとしていた人達は喜んでイエス様をすぐに捕らえ、殺したでしょう。25.26節には「7:25 さて、エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。7:26 あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。」とありますように、ユダヤ教の指導者達がイエス様を殺そうとしていることは、皆が知っていることだったからです。ですから、はっきりイエス様が「わたしは神様のもとから遣わされた神の御子である」とでも言おうものならば、すぐに捕らえられるか、或いは暗殺されてしまうことになってしまう。それを避けたわけです。しかし、もっと大切な、根本的な理由があります。それは、「まだ時が来ていない」からです。イエス様の時は、イエス様が父なる神様によって遣わされた意図、目的、つまり「神様の救いの御業を成就するために十字架に架けられる、そして復活し、天に昇る」という時がまだ来ていなかった。ですから、この時が来るまで、イエス様はご自身が神の御子であることを誰にでも分かるように、明確に断言するということをされませんでした。そして、神の御子である私がというものがどういうものなのか、「父なる神様の御許から神様に遣わされて来て、神様の御許に帰るものである」と告げられたのです。

7. 遣わされた方

ここで大切なことは、イエス様は「遣わされた方」だったということです。イエス様が自分の計画によって天の父なる神様の御許から離れて地上に来られたのではなく、父なる神様に遣わされてやって来たこととイエス様が告げられたことです。遣わされたということは、イエス様を遣わした方には何らかの意図があったということです。先ほど出エジプト記3章の一部をお読みしました。この出エジプト記3章はモーセが神様によって召し出されたところです。ここで神様はモーセにはっきりとこう告げられました。10節「3:10 今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」神様はイスラエルの民をエジプトから連れ出す、奴隷の状態から救い出す、この明確な意図を持ってモーセをエジプトの王ファラオのもとに遣わされました。何の意図もなく、神様が遣わされるということはありません。神様は愛する独り子を、明確な意図を持って天から遣わされました。その意図とは、私共罪人を救い、神様との交わりを回復し、永遠の命を与えるというものでした。その天の父なる神様の意図をイエス様はご存じでした。そして、その意図、その御意思を全うするためにイエス様は来られたわけです。しかし、この時、まだその時は来ていませんでした。神様の御業が為されるのには、時があります。それは私共の時できなく、神様の時です。神様がその御意思を全うする時、私共の思いを超えて、全ては神様の御支配、導きの中で、全てが整えられていきます。イエス様にとって、それは十字架にお架かりなられる時でした。そして、十字架は復活へと更に昇天へと続きます。その出来事によ

って、私共はただイエス様を信じるだけで一切の罪を赦していただき、神の子としていただき、永遠の命に生きるものとしていただきました。なんとありがたいことでしょう。

8. 遣わされた私共

皆さん、私共も神様に遣わされた者です。私も妻もそうです。昨年、私共はこの教会に、この宮崎の地に遣わされてまいりました。そこには神様の意図、御意思というものがありました。それは、神様の救いを宣べ伝えていくこと、神様の前進していく救いの御業にお仕えすることです。牧師ですから、当たり前のことです。牧師の転任というものは、新しい地に遣わされる神様の御心というものがあるわけです。しかし、それは何も牧師に限ったことではありません。私共がここにいるということは、神様が私共をこの地に、この教会に遣わされたということです。この地に来られた理由は、それぞれあるでしょう。しかし、それが本当の理由ではありません。それは目に見えるきっかけであり、具体的には家庭や仕事上の都合かもしれません。しかし、その背後には神様の意図、神様のご計画というものがあります。それは牧師の場合と変わりません。「前進していく神様の救いの御業にお仕えする」ということです。そのために、私共は周りのイエス様を知らない人よりも少し早くイエス様に出会い、信仰を与えられ、救われました。それは、私共が神様の救いの御業に仕えるためです。このことをしっかり受け止めましょう。私共が救われたのには理由がある。神様の意図、神様のご計画がある。そのご計画の中で、私共は信仰の歩みをしています。

101年前にこの教会を建てて伝道を開始した信仰の先達達、この101年の間に救いに与った多くの者たち、彼らはこの地における神様の救いのご計画というものを信じ、自分たちに課せられた責任というものを明確に自覚していました。この神様の救いのご計画への信頼、そしてこの地に遣わされた者としての責任と自覚、これなくしてこの教会が立ち続けることはなかったでしょう。勿論、神様が御業を為されるのには、神様の時というものがあります。来週のリードオルガンコンサート、そしてオルガン講習会、オルガンレッスンが、その神様のご計画が満たされた時と業として用いられることを、心から祈るものです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝私共は、聖書の言葉を通して、イエス様が神の御子であられ、私共を救うために来られたお方であることを改めて知らされました。心からイエス様の御名を誉め讃えます。そして、私共が救いに与りましたのも、この教会に集っておりますのも、あなた様の救いのご計画の中でのことであることを心より感謝します。どうか、私共があなた様の救いの御業にお仕えすることが出来ますよう、いよいよ私共を強め、清めてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン